



大阪出張を終えてセフレにメールをする。
割り切ったセックスライフを楽しむために…。

気まぐれ 大阪ヤリ目旅行

樋口めぐむ イラスト/水樹凱

大阪でセフレと再会

がつがつした、がさつな若い男とはちがう、トシユキさんの愛撫には、年齢と経験の豊富さから来る余裕がある。

ベッドに並んで腰をおろして、肩を抱き寄せられて耳たぶをいやらしく舐められながら、ワイシャツ越しに胸を撫でられている。シャツの中で乳首が、硬く尖り始める。

出張で、というのは半ば口実で、というのも昼すぎには商談がまとまっており、横浜へ帰れる時刻に仕事が終わったのに、宿泊を決めたのはトシユキさんが大阪に住んでいることを思い出したからだ。

トシユキさんと知り合ったのは一年前、桃アプリで「まったくセーフなエッチどうですか?」とハウリングしているのを見つけたのが切っ掛けだった。

メッセージを送って会うことになり、喫茶店で彼が横浜出身で帰省中であること、いまは大阪に暮らしていることなどを聞き、その後、彼が泊まるホテルにしげこんだ。いいセックスができて、「また機会があったら」と別れて、それで一年ぶりに、あの「いいセックス」を味わいたいと思ったのだ。

「シャワー、浴びよか?」

胸を撫でられながら、トシユキさんに関西弁で囁かれる。うん、と武士はうなずき、トシユキさんの手でワイシャツのボタンが外されてゆく。

事務処理などの仕事が終わって営業所を出て、週末であるし横浜に戻ってもいいし大

阪で遊んでもいいな、と思った。どちらでもいいと適当な気分です。トシユキさんのケイタイにメールをして、すると五分もしないうちに夜に会おうと誘われた。大阪の北のゲイタウン、堂山にある老舗のハッテンバの個室を予約しておくから、と。

約束した時刻に待ち合わせたデパートにトシユキさんが現れて、連れて行かれたお好み焼き屋で酔わない程度にビールを飲み、それからハッテンバの個室に入った。部屋代はワリカンにした。

元々武士は人見知りする性格ではないが、トシユキさんが相手だと、特に緊張をしない。それは、たぶん目的が一致しているからだし、トシユキさんが配慮できる大人だからだ。

武士はウケのセックスが好きで、気持ちよくなりたがる。トシユキさんは若い頃からタチしか経験がなく、ウケをひたすらに気持ちよくさせたくて、その姿を存分に見て愉しみたい。目的が一致している。

全裸になり、ふたりで備え付けの浴室に入った。武士は二十代後半で、週に二日か三日ジムに行き汗を流して、それで六つに割れた腹筋や胸板や脚の筋肉が十分に保たれている。がむしやらに筋トレをするわけではないが、まあ、細マッチョの部類に入るだろう。桃アブリでの属性はウルフでレベルは四十二だ。

一方トシユキさんは三十代の後半で、太っているわけではないし胸板もそれなりにあるし、けれども、お腹周りにゆるみ始める

気配が漂っている。

でも、年齢により熟れ始めた身体を、武士はきらいではない。トシユキさんは人当たりがやわらかくマナーをわきまえて、つまり知性を感じて、知性ある男の崩れ始めた身体ラインは、率直に言っている。筋肉だけが取り柄のひとつとは違うところがあ。武士は、選ぶ誰専だ。

トシユキさんがジムに行っているのかを武士は知らない。何の仕事をして、どこに住んでいるのかを知らず、同様に、トシユキさんも武士の色々を知らない。お互いプライベートに踏み込まず、でも、なんとなくセックスを愉しみ、その割り切った関係が心地よい。

泡立てた石鹸をたっぷり手のひらに取り、武士の背中を胸を腹を、トシユキさんが撫でてくれる。不思議だ、トシユキさんの手のひらは、魔法の手のひらではないだろうか。何の技法を施しているわけでもない、でも、彼に撫でられると全身からちかちかが抜けてゆき、でもペニスは雄々しく頭を持ちあげるのだ。

向かい合って、湯を浴びながら口づけをして舌を絡め合い、トシユキさんの顔を間近に見る。仕事のせいだろうか髪はなく、切れ長の眉の下の柔らかくも冷たい眼。知性と理性と清潔感のある成熟した大人の顔。でも、股間は屹立している。そこだけは理性に支配されない。卑猥だ。

タオルで身体を拭いてペニスを半分硬くさせたままベッドに入る。微笑をしながら

トシユキさんが武士の頬に手のひらを置き、薄く微笑をしながら額に、鼻に口づける。武士もお返しとしてトシユキさんの頬にキスをして、まるで恋人同士のようないやつさだ。ほんとうは、ただセックスだけのつながりなのだが。

部屋の明かりを落とさないまま、トシユキさんがゆっくり押し掛かってくる。痕がつかないように配慮された口づけを首筋に受けながら、そつと、乳首を魔法の手のひらで撫でられている。

「う」
思わず武士は声を洩らす。強烈な快感が襲ってくるわけではない、触れるか触れないか、微妙な加減で手のひらは乳首をすべり、むず痒いような、もつと求めたくなるような、でも確実に快感と呼べるものが背中を走っている。こんな繊細な快感の引き出し方は、経験不足の若者には無理だ。

トシユキさんの舌が乳首に降りてくる。やはり繊細だけれども、どうすれば快感を引き出せるのか熟知した舐め方だ。乳首から湧き起こる快感が背を走り、ペニスの先端までびんびんと届く。
「んん」

武士は赤ん坊のようにトシユキさんの頭を抱きかかえて、その間にもトシユキさんの舌は休まず、手のひらは抜かりなく脇腹を、腿を撫でている。相乗効果で徐々に快感が強くなり、武士の声も次第に艶を帯びてくる。

以前に寝たとき言っていた、トシユキさ

んはバックが嫌いだと。腕を脚をペニスを唇を、全身を使って相手から快感を引き出して、その様子を観察するのが好きなのだ、と。

トシユキさんの舌が乳首から腋へと移り、毛を掻き分けて舐められる。恥ずかしい。けれどもその恥ずかしさが快感を増幅する。腋の下も性感帯だと武士は知り、その間にも腿に硬く熱いトシユキさんのペニスが押し当てられている。その感触が心地よい。腿もまた、いまは性感帯になっている。

だが、肝心のペニスをさわってもらえない。ときどき思い出したように拳丸を軽く握ってもらえるのだけれども、物欲しさによだれを垂らしたペニスは握ってもらえない。だから、さわってと訴えるために、見てもなく武士の腰はうねっている。

知っている、そんな風に乱れ始めた武士の様子を、しっかりとトシユキさんが見ていること。
「タケシくん感じ方はええなあ」一年前にセックスをした後、トシユキさんは腕枕をしながら言った。「恥ずかしいからやるな、感じてるのん隠そうとするやろ。でも、きみ、けつきよく感じてまうねん。その我慢して表情と、でも最後には声を出してまう様子が色っぽいねん、おれ好きやわ」

トシユキさんの望みどおりになんかなくてやるものか、と、なぜだろう反発心が起こる。だが、見透かしたように唐突にペニスを握られて、先汁をこぼした先端をゆるゆると擦られて、「んぐ」けつきよくは声を

洩らしてしまっ。

そんな武士を、トシユキさんが見ている。身体を重ねるまでは知的な眼をしていた。でも、いまは、好色な助平おやじの眼になっている。

だが、その助平根性丸出しの眼が、たまたまなく武士を刺戟するのだ、いまは。トシ

ユキさんを見つめ返す武士の眼も欲情に潤み、助平根性丸出しになっているだろう。

トシユキさんが膝立ちして、雄々しくなったペニスが眼の前に突き出された。うわぞりで、亀頭の大きい、色の黒い、ふてぶてしいペニス。

欲情したままそれに見惚れていると、コン

ドームを渡された。Lサイズのコンドーム。

意図を理解して、武士はトシユキさんのペニスにそれを装着した。装着したペニスを口に含む。

充実感。さすが、Lサイズを着用するだけのことはある。

「ええよ、うまいで」

トシユキさんが腰を振り、頬を舌のうえをペニスが摩擦する。

口から抜かれたペニスで顔を叩かれて、欲望のままに舌でそれを追い、また口の中にペニスを突っ込まれる。

フェラをしながら、無意識に武士は自分のペニスを握っている。焦らされて、じつくりと快樂の火に焼かれたペニスは、限界まで膨らんでいる。

ペニスを咥えながらペニスを握り締めて擦っている武士を見おろしながら、トシユキさんが乳首に指を伸ばしてくる。ずつと、そつと撫でられていたのに、初めて、きゅつと掴まれた。

「！」

その一瞬の快感に全身がびくつと反応して、ペニスを握る手にもちからがこもる。

ペニスがぬかれて、トシユキさんに口を貪られる。

「かわええわ、めっちゃ昂奮する」

両脚を開かれて、トシユキさんがその間に身をねじ入れてくる。

二本のペニスを重ねて、枕元に用意してあったローションをたっぷりこぼした。

「う……」

「にちよ、ぐちよ、と音が立ち、二本のペニスが擦り合わされる。

トシユキさんのペニスが熱い、熱となった快感が下半身に広がり顔がゆがむ。

しかし、そのゆがんだ顔こそがトシユキさんの好物なのだ。そして、満足そうに怪しいいやらしい光を宿したトシユキさ



んの眼が、武士の好物でもあった。

「いい、気持ちいい……」

うなされたようにつぶやく武士を抱きしめて、トシユキさんが口を吸い舌を絡め合いながら、その間も腰を振ってペニスをペニスにぶつけている。情熱的な抱擁、まるで恋人同士のような。

その錯覚が、更なる快感を呼ぶ。いまだけはトシユキさんという単なるセフレを、愛おしい、と勘違いできて、愛おしさは、技巧とは無縁に快感を呼ぶ。

「イキたい？」

トシユキさんに問われて、うん、うん、と何度もうなずいた。

仰向けになる武士の横に両膝をついて、両手を動かしやすいようにトシユキさんが体勢を変える。

たつぷりのローションを両の手のひらに取り、右手をペニスに、左手を乳首に伸ばした。

ぐちよくちよくちゅ、と淫らな音をリズムカルに立ててペニスが擦られて、同時に乳首を掴まれて撫でられて、気持ちいい、声が洩れる、表情がゆがむ。そんな武士をトシユキさんが見おろして、気がつけば武士はかたわ傍らのトシユキさんのペニスを握っている。

膨らみに膨らんだ亀頭を擦られて、ときに皮を下まで引っぱられて、真夏のアイスクリームのように下半身が溶けてしまい、直後にばく爆ぜる感じが武士を襲った。

「あつ、イク、イク——」

視界全体が白くなり、表情を繕っている余裕はなく、武士は腹と言わず胸と言わず体液を放った。

はあ、はあ、と息が荒く、だが、それで終わりではなかった。射精直後で敏感になった亀頭をトシユキさんが揉むように、玩ぶように擦っている。

「んあつ、やだ」

訴えたけれども、やめてもらえるはずがない。夕子の与える愛撫に身悶えるウケ、それを存分に見たくてトシユキさんはセックスをしているのだから。

亀頭の上側の、滑らかな部分を親指でゆるゆると擦られる。不意に尿道を人差し指でいじられて、あ、びくっ、と身体が反応する。

手のひらで大きく包まれてペニス全体を絞るように擦られて、ほとんど苦痛に似たものが身体を走って、駄目、とトシユキさんの手をとめたいけれども、それをしなかったのは苦痛の中に確かに快感の余韻が混じっていたからだ。

愛撫は、ペニスが完全に萎むまで長く続いた。快感で眼が潤み、だが潤んだ視界の向こうにトシユキさんの怒張があり、ゴムを外してローションを塗り、それを擦る。武士が絶頂を迎える姿を見て昂奮していたのか、それほど長くは掛からずにトシユキさんも武士の腹の上に精を放った。

枕元のティッシュで体液を拭い、ふたりにシャワーを浴びてローションや汗や体液を流した。

ベッドにもどり、恋人同士のようにいちゃ

いちゃとしながらハグやキスを繰り返して、甘い時間を過ごす。

だが、一時間ほどが経ち、

「そろそろ行かな」

トシユキさんがスーツを着始める。

「帰るの？」

「ああ、相手、家で待ってるし」

額にキスをして、「ほな、また機会あったら」とトシユキさんが部屋を出てゆく。彼に、長く付き合う相方さんがいることは聞かされてきた。それを知っているから、後腐れなく遊べるのだ。

スーツを引き寄せて明かりを消して、すっ裸のまま、武士はぐっすりと眠った。

堂山で出会った台湾人

翌朝、ワイシャツとTシャツだけ着替えてハッテン場を出て、駅のコインロッカーに荷物を突っ込んでカフエで休憩をした。気持ちのいいセックスができたし横浜に帰ってもいいのだが、せっかく大阪に来たのだから観光をしようと思った。もっとも、スーツに革靴なので遠距離を歩くのは御免だが。

ケータイを開き、珈琲を飲みながらメルチェックを済ましてカフエを出る。行ったことがないから、と地下鉄の御堂筋線に乗りミナミに行き、アメリカ村をぶらつきたり、道頓堀でランチを食べたりした。土曜日のミナミは土曜日の横浜同様にひとで賑わっている。

ケータイで、大阪のゲイタウン・堂山に近いホテルを当日予約してあった。夜に、知らない土地のバーで一杯飲みたいと思ったのだ。

御堂筋線でキタへ戻り、チェックインできる時刻なのでコインロッカーから荷物を取り出してホテルに入った。まだ夕方までバーが開くまでには時間があるので仮眠をした。夜になり、電子タブレットで堂山のゲイバーを調べて、夕食を済ませてから目当ての一軒を訪れた。カラオケがなく、武士と同年代の客がよく訪れると思しき店だ。

カウンターだけの薄暗い店だった。はやっていて、まだ早い時刻なのに席はひとつしか空いておらず、笑顔の柔和なマスターにそこへ案内された。

ビールを注文して飲みながら、旅行者であること、大阪は初めてであることなどをマスターに話すと、「このひとも旅行者やで」隣の客を紹介された。

武士より若い二十代前半だろうか、がちりした身体で赤いラガーシャツがよく似合い、眉が太く無精ひげが似合い、賢い犬を連想させる眼をしていた。

「どちらから来られたんですか？」

笑顔で話し掛けると困った顔で、日本語は話せない、と英語で言う。その、はにかんだ一瞬の表情が可愛らしい。

武士は中学生レベルでしか英語を話せない。それでもコミユニケーションを試みる。

彼は、ウー、という名前であるらしい。ウーくんは台湾の大学生で観光で日本を訪れた

から、雄の匂いがする。

口の中でちんぽが動かされてその感触を存分に味わう。

しゃぶりながら武士はウーくんの尻を抱きかかえる。わしづかみにする。たくましいのは上半身だけではない、ばんばんに筋肉が張った尻肉、うっすら毛が萌えて筋肉の線が走った太い腿。こんなにも昂奮する肉体に出会ったのはひさしぶりだ。

突然にちんぽを口から抜いたウーくんが軽々と武士の腰を抱きかかえてうつつ伏せにする。武士は四つん這いとなり、尻を高く

あげさせられて、何もかもをウーくんの眼にさらしている。

恥ずかしい、だが昂奮する。

ウーくんの分厚い手に尻の肉をつかまれて、広げられた。何もかもが空気にさらされていく。

肉壺に、ウーくんの視線を感じる。ざらざらした、雄の眼差し、それすらも愛撫のように感じる。視線を感じて、肉壺がひくひくと動く。その様子もウーくんに見られている！

「ああ…」

ウーくんがローションのボトルを手にし、それがたつぷりと背中中、尻に垂らされた。ローションは糸を引いてベッドにもこぼれ落ちる。シートを汚して、ホテルに叱られないだろうか。

だが、ローションでぬるぬるになった背中をウーくんの手で舐めるように撫でられて、肉壺に、ぴと、と指がふれた瞬間、ホテルに叱られるなんて心配は頭から消えた。指がゆつくりと円回転した後、探るように、じわじわと肉壺に進入してくる。

「…はあ」

指が埋まり、その感触で腰が痺れたようになり、武士は枕に顔を埋めた。指が、慎重に出し入れされる。

「…っう」

指を出し入れされながら、背中を撫でられてそのウーくんの手が身体の前面にまわってくる。胸を撫でられて尖った乳首を撫でられて、乳首とケツマンコがつながり快感が背中を電流のように走る。

頬にウーくんから口づけを受けて、耳に「はあ、はあ」と熱風のような吐息を注がれて、快感に思わず武士の背中がしなる。





指を埋めたままウーくんが背後にまわる。

「！」

ケツマンコをいじくられながら、ちんぽを握られた。ローションでぬるぬるの手のひらでぐちょぐちょと擦られて、ぐいっと尻のほうに折られる。

「はあっ」

尻のほうに折られたちんぽの先端を中心に擦られて、痛い、だが痛みを越えた快感がある。

ぐちょよ、ぶちょよ、とローションの音が室内に充ちている。

ちんぽをいじられている間に、気がつけばケツマンコに埋められた指が二本に増えたようだ。このままいじられ続けたら、ウーくんとながらないうちに達してしまうかもしれない。

「ああ：ウー」

枕から顔をずらしてウーくんの名を呼び求める。ウーくんを見つめる武士の眼は、与えられた快感に潤んでいる。

ケツマンコは充分にゆるんだ。ウーくんが指を抜き、武士の腰を手のひらで引き寄せる。

いよいよだ、そう思った。

だが、ウーくんは容易には挿入をしてくれなかった。灼熱のちんぽをケツマンコに当てて、上から下へとすべらせて、時々いたぶるように叩く。その刺戟の一々が、武士の昂奮を高める。

「ウー、焦らさないで…」英語を使っている余裕はなかった。無意識に日本語で武士は

ウーくんを求めていた。「ちんぽ、ちんぽが欲しい」

ずるずると、ウーくんのちんぽが挿入された。

ウーくんが武士の身体を抱き、背中に押し掛かってくる。ウーくんの分厚い胸を背中に感じて、その間もウーくんが腰を振り、うなじに頬にキスを受ける。

「いいっ、いいっ、すげえ、気持ちいい！」

自分が何をわめているのか、武士には自覚がなかった。ただ屈強なウーくんのピストン運動に翻弄されて、的確に前立腺を突いてくるちんぽに泣きわめくだけだった。

体勢を変えさせられて正常位で掘られている。両脚を大きく開き、思わずつながった部分に眼が行き、薄い闇の中、白い泡をまとったウーくんのちんぽが武士に出入りしている。

思わず武士はウーくんの首を抱き寄せて、唇を掃除機のように吸った。ウーくんに折れんばかりに抱きしめられて、頭の中が真っ白になる。

気がつけば掘られながらちんぽをウーくんに握られている。擦られている。ケツマンコが熱い。前立腺を突かれるたびに雷が頭に落ちたようになる。

と同時にちんぽをぬるぬるとぐちょぐちょと擦られている。ぱんぱんに膨れあがった亀頭をぐるぐると手のひらで刺戟されている。

限界は近かった。長くは耐えられない。

「ウー、イクっ、あ、イクーっ」

腹と言わず胸と言わず武士は精液を派手に放ち、しばらくしてウーくんも武士の腹の上に射精した。

満足の口づけを交し合って、疲れと荒い息がようやく落ち着いたら頃、シャワーを浴びてローションを洗い落としした。

ウーくんは「泊まって行けば。いっしょに寝よう」と言ってくれたけれども、遊びと割り切った相手と同じベッドで就寝してもぐっすり眠れる気がせず、自分のホテルに帰ることにした。

それを告げるとウーくんは、一瞬淋しそうな眼をした。

でも、武士をとめはしなかった。

また会う機会に備えて、一応メルアドは交換しておいた。台湾にひとり、セフレができた。

そして横浜へ、彼氏の元へ…

窓の向こうに浜名湖が広がり、横浜に着いたらデパ地下でお惣菜でも買っていこうか、と思う。大阪土産として有名な豚まんを用意してあるけれども、夕飯用にもう二、三品見繕ってもいい。

家には、共に暮らすパートナーが待っている。新大阪駅でメールをしておいた、「今から新幹線乗るよー」

大学生の頃に付き合い始めて社会人になって同居をして、お互いの両親にも紹介しており「生涯の伴侶」であることは伝え

である。

浜名湖が見えなくなり、大阪でのセックスを思い出している。

トシユキさんのセックスは、濃厚なのにさっぱりとした、塩味のセックスだった。

一方、荒々しいウーくんとのそれは、刺戟的で強烈で、スパイシー。

どちらも捨てがたい。どちらのセックスにも、いい面がある。

パートナーとは、ここ二年ほどセックスをしていない。していないのだから、塩もスパイスもあつたものではない。

武士が性欲をどう処理しているのか、パートナーは勘づいているだろう。パートナーが性欲をどうしているのか、武士も何となく察している。

でも、セックスがなくなっても、別れるという選択肢は、少なくとも武士の中にはない。

性欲の解消が、人生で最も重要なわけではないのだ。

(ア)